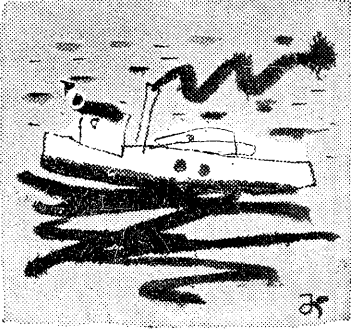


沖 繩 の 旅



戸 倉 ハ ル

去る三月二十八日早晩四時半、機はカーテンを閉め切ったまま、軽い振動を感じさせて、無事に——全く無事という以外にたとえようもない——未知の島、沖縄は那覇飛行場に第一歩を印した。

四時間半、外気と全く隔てられて居て降り立つと、未明の空気が澄み切って、この時ほど空気のうまさを感じたことはない。贈られた百合、ガーベラの花の香が、思いなしか暖くさえ感じられた。又、中天にかかるオレンジ色の月の美しさ、これをしも南国の月と云うのであろう。

私の渡島の目的は、彼地の体育振興のため、沖縄教職員会の招きで、ダンスの講習会をすることであった。

翌日から始められた連日の講習には、戦前戦後を通じて始めてというので、はるか宮古、八重山の離島から、約一昼夜の航海を経て来られた人もあり、午前九時から午後五時までの講習に、一人の落伍者もないことには、感服の外なかった。併し、幼稚園から大学に至る過程に於いて、女子の体育の有資格者が全然ないことに、なお驚いた。目を重ねるに従い、すべてに情熱的

あることが、南欧に相通するものである様に思えた。たまたま聞いた民謡の歌詞の中にも、それがみられるので、ここにその一つを挙げてみよう。

恩納嶽 オンナダケ 彼方 カノカタ 里が生れ島 サトノナマ
森ん押しぬきて モリノシメテ 此方 ココノカタ なさな

「恩納嶽の向うに彼の生れ故郷がある。山が邪魔になるから、押しつけてこちらに引き寄せたいものである」という意味のこの歌は、私をひどく感動させた。

気候は、東京の七月初旬ほどと思われたが、日中の陽ざしに比べて朝夕涼しく、乾燥しているせいか、割合にしのぎよいといえ、はや、蚊帳を用いるとは、出発の日におーヴァーを脱ぎ捨てた私にとって想像だに出来ないことであった。十二月に桜が咲いて散り、三月の末には、こちらの三倍ほどもあるかと思われる大きな桃の花が、真紅に咲いていた。大体三月から十二月まで扇機機の必要を感じるという、まことに熱帯的気候である。

戦前は、美しい自然の風光を誇っていたといわれる所でも、全壊に近く変貌し、僅か鄙地に残る古の面影に、限らない哀愁を

感じた。その昔、近辺の島をもその輩下に治めていた尚家の王城こそ跡形もなく、今は、そこに近代的な琉球大学の校舎が建てられている。

一島は、行政上、南、中、北に三分され、講習会は、南部の那覇、中部の胡差、北部の名護、それに最北部の辺土名の四ヶ所で行なわれたので、島を縦断する舗装道路をよく利用したが、交通機関は自動車のみとただけに、その数もおびただしく、人口に対するバスの台数は世界一、トラックが三位、タクシーが五位という成績は、あの狭い島には不釣合の様に思われた。

車窓から眺める民家は、田舎では、颱風に備えた、勾配の大きいかやぶき屋根が多く、町に入ると、トタンや琉球瓦の屋根も見られ、未だに、大部分が板の間にござ敷という生活をもてまわかるように、生活程度はかなり低い。従って、教育機関の設備もまだまだ不十分である。

バナナや、パイナップル、パイナップルの葉蔭に、年老いた女の人が、琉球がすりを短く着、髪をまとめて結い上げ、こちらのお齒黒に匹敵する手の刺青を見せながら、

頭に荷物をせて歩くという昔の名残を見かける外は、いわゆる琉装は巷から消えていた。

島の名物は、豚と甘藷といわれるだけに、豚料理が沖縄の特徴であり、珍らしい料理が数多く見られた。甘藷は、銘酒泡盛の原料として一年中作られるとは、いも好きの人には羨しい話である。特に、もぎたての果物の味は格別であった。四方海に囲まれて、その幸を集めているが、えび、かきを始め、魚類すべてが大作りで、鱗の衣裳はなかなかの豪華さ、味より見た目というのが実感であろう。中でも、「かたかし」という緋鯉のような魚は、鯛をしのぐものであった。一流のホテルの高級の食膳に、紫色の海苔、塩鮭、さんまの罐詰、焼めざしが供されたが、これらはこの島に無いもので、御馳走のつもりであった。砂糖が大小数々の工場によって精製され、大きな収益を上げているようである。

大陸の影響を受けた、渋い味の陶器を始め、手の込んだ「べにがた」という型押し染物、それに有名なかすり等の民芸品が、多く伝えられているし、無形文化財として

の琉球舞師の流麗な美しさは、古武術、空手に残る武士道精神と相俟って、世界に伍して行くに値し、あたかも、焼跡の中から玉を見出すにも似た喜びを感じたものである。特に、民謡が酔し出す情熱的な、しかし感傷的な雰囲気は、南海に孤立した離島の運命を訴えんばかりに思われた。

沖縄といえ、ひめゆりの塔、健児の塔と、映画に見、話に聞くだけに悲惨な一幕をあげた南端の戦跡は、直接肉親に犠牲者を出した人の話されるところによれば、なお一層厳肅な事実であり、未だに、壕附近からは人骨や遺留品が発掘されるのと、鐘乳洞の壁部、岩壁のすみずみに、若き叫びが今もなお滲透しているようであった。参詣人の絶え間がなく、花東が、その霊を慰めるべく、うず高く積まれていたが、それは悲しい姿であった。

見るもの、聞くものに一々感激していた二十日間も夢のように過ぎ去り、絶ち切れぬ気持を振り切つて、四月十五日午後零時半、帰途についた。

(お茶の水女子大学教授)